
この世は狂っている

墮天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この世は狂っている

【Nコード】

N7535T

【作者名】

堕天使

【あらすじ】

ここは2030年人々が機械に従う世界

第1話 始まり

ここは2030年 人々が機械に従う世界

「はあー暇だなあ」

「何言つてんだよ、これから高校の入学式だろ武士」

「そんな事分かってるよ龍司、そんな事じゃなくて終わってからだよ」

「その通りだなこの後どうする予定無いし」

「まっ適当にブラブラするか」

「そうするか」

キーンコーンカーン 俺たちが会話をやめたらチャイムが鳴り始めた。これから高校の入学式が始まる。

おっとここまで何の紹介文無しか、ここらで紹介しておくか。

今紹介するのが主人公の俺文堂武士^{ぶんどうたけし}。大抵の事は人並み以上に行けるが、これと言って飛び抜けていることは無いルックスも中の上だ。性格は穏和な方だ。大体こんな所だ他の事は、後々書かれるだろう。

次は親友の一龍司^{いちりゅうじ}。某大企業の息子だ。さらに、スポーツ万能・成績優秀・イケメンの万能人間だ、少しけち臭く熱血なのが玉に傷だ。俺より少し言葉使いが丁寧だ。まあ大体こんな所以下略。

無事入学式も終わり校門を出たところで、俺らに声を掛けてきたやつがいた。

時代が進んでも学校の形は、何一つ変わっていない。閑話休題

「おい、ジャイアン・イチ何してんの？」

ジャイアンは、俺のことだ、これは某ロボットアニメのキャラに名前と同じ名前だからだ。

イチは、龍司ことだ、これは一よりイチの方が言い易いからだ。
そして、今俺らに声を掛けたのは、南浩みなみひろ

こいつは、俺らの中学からの親友だ。同じ部活で、家が近くで、話題がよく話していたらいつの間にか俺らと親しくなった。こいつの家は龍司と違って、かなり貧乏だ、そのため高校も奨学金で入っているその為か、かなりあたまが良い具体的には、全国模試で1位になるくらいだ。そのためかスポーツはからっきしだめだ。ルックスはかなり良いその所為か知的美人なんて呼ばれておるらしい。けっこつ明るいや奴だ。まあ以下略

「何もしていないが」

と龍司が、言うつ。すかさず浩が言った。

「じゃああ、行きたい場所があるから一緒に行こう」

「いいけどさあ、どこ行くんだよ」

「それはヒ・ミ・ツ」

「まあ、いいけど」

こうして俺ら3人組の高校生活が始まった。えっ入学式は、それは次回にしよう。

第1話 始まり（後書き）

初投稿です。よろしくお願いします。更新は不定期です。

第2話 高校生活が始まる（前書き）

フィクションです

第2話 高校生活が始まる

キンコンカーンコンとチャイムが鳴りアナウンスが聞こえる。

「新入生の皆さんは、講堂にお入りください間もなく入学式が始まります。繰り返します・・・」

ここ黒龍星学園こくりゅうせいがくえんの入学式はちよつと変わっている、この時代に全員が持っている携帯タブレットに学校の地図を配信するくらいは当たり前だが、学校に来てすぐ講堂に行くしかもすぐにだ。そして新入生が全て講堂に入ったらようやく入学式が始まる。終わるとタブレットにクラス割が配信されて、そこから各自で自分のクラスに移動する。

そして今、新入生が全員揃い入学式が始まるうとしていた。当たり前だがそこにはやはり、武士と龍司（これは失礼かもしれないが）さらに浩もいる。

「入学式なんて退屈だよなあ」

式と名の付く物が苦手な武士が呟くと返事があつた。

「そうかな、僕は結構好きだけどなこの雰囲気とか」

少数派な意見聞きながら大多数派としては。

「そんなもんか、よく分からんなあ。あつ校長の話が始まる」

「新入生の皆さんご入学おめでとう御座います。さて皆さんは・・・」

古今東西偉い人の挨拶は退屈で長く決まった事しか言わない。

この校長も例に漏れずそうらしい。

長い入学式も終わりを迎えようとしていた。

「これで黒龍星学園の入学式を終了します」

「やっと終わった」

伸びをしながら武士は言った。

「そうかい数ヶ月前の卒業式よりは短いと思うが」
こちらは座ったままで龍司が言う。

「あれは例外だろ、それよりクラスに行こうぜ確か同じ1-Dだったよな」

「そうだったと思うよ。だけどごめんちょっと用事が出来たHR《ホームルーム》には間に合うけど一緒には行けそうにない悪いが先に行つててくれないか」

「ああいいぜ、じゃ後で会おうな」

一人でクラスに向かう途中に先ほどの出来事を思い出す。
どうしたんだろう今までこんな事無かったのに、あいつもやっぱり偉い人の息子なんだな。

そんな事を考えながら自分の所属するクラス1-Dに向かった。
ここ1-Dは俺と龍司さらに（こんな言い方は悪いかもしれないが）浩もいるクラスだ。

考え事をしていた所為か教室に入るのは遅くなってしまった。
教室に入ると既に浩がいて俺に手を振ってきた。

そんな浩の隣に座った。何故か俺の席は浩の隣、龍司の後ろだった。

ちなみにこの学園の席はランダムに決まるシステムだ。

座ると浩が話掛けてきた。

「おージャイアンやつと会えたね、待ちくたびれたよ、イチはどうしたんだい」

「用事があつて遅れるって」

「どんな用事だろうね」

「人の事はあんまり詮索するなよマナーだろ」

そんな会話をしていたら扉が開いた入ってきたのは、龍司だった。

その直後にチャイムが鳴り教師が入ってきた。
龍司が着席した後に全員いることを確認したのかHRを始めた。

第2話 高校生活が始まる（後書き）

もう少ししたら1話の後半に繋がります。誤字脱字があればどんどん言ってください。その度に直します。

第3話 到着（前書き）

1話と繋がりました

第3話 到着

ホームルーム

H Rと言つても、簡単な担任紹介だけで、しかもやる気がないので3分で終つた。

H Rが終わり授業も、明日からなので、クラスの半分は帰り支度をしていた。

例外は、部活動に熱心で見学しに行く奴ら。

もしくは、先輩に知り合いがいる奴。

後は、キチガイで余ほど好きな、物がある奴くらいだ。

部活動に、力を入れているため、1番始めの奴らはある程度いた。

俺らは部活動に熱心でも、先輩に知り合いでも、キチガイでもなく、帰り支度をしていた。

「さつ、ジャイアン・イチ行くよ」

入学式の前にした約束を、覚えていたのか浩が話し掛けてきた。

「いいけど、何処行くか言えよ」

何度か、聞いたが教えてくれない。

「だからヒミツだつて」

「しかないから諦めるけど、ヒントくらいくれよ」

「そうだね何も、情報が無い不安だからね」

人間何処に行くのか分からないのは、不安になる。

「しかたないな。ヒントはPPC。パーフェクトプログラムコンピュータこれから推測してみて」

「PPC何て物、俺らに關係してるのか」

「正確には、これから關係するよ」

俺ら（浩を除く2人）は、頭に？を、浮かべながら、それ以上は言葉を紡げずに、浩に付いていった。

着いた所は、安さと量を、売りにしている店だった。

案内された処に、座ると早速、思ったところを言った。

「ここか。このどこが、P P Cと関係するんだ」

「ここじゃないよ」

「じゃあ何でここに、来たの？」

龍司が、疑問を投げかける。

俺も、同じ事を思っていた。

「だつてお昼だよ」

「「は」」

おもわず声が、被った。

どうやら本気らしい。メニューを手に取り、どれをたのもうか悩み始めた。

混乱しながら、俺らもメニューをそれぞれ手に取り、何かたのもうかと、メニューを見た。

どうやら、お昼で腹が減っていたらしく、どれをたのもうか俺も悩みだした。

いくつか注文したところで、先ほどの疑問を、投げかける。

「で、何でここに来たの」

始めに、龍司が口にした。

「そうだぜ何でここなんだ」

「だから。お昼だからお腹減るでしょ。目的地はここから、ちょっと遠いから、その前に昼食にしようと思って」

どうやら、昼食にためらしい。

「じゃあ、P P Cとは、関係ないんだな」

「そうだよ」

本当にP P Cとは、関係ないらしい。

その後は俺らの、高校の話になった。

「そういえば、あの高校卒業生らしいよ。P P C作った人」

「マジ」

「くだらない、あんなのがあから、この世がおかしくなるのよ」
今世の中は、P P Cの賛成派の大多数と反対の少数派がいる。

俺らは、俺が賛成、龍司が中立、浩が賛成と、なっている。

「まあまあ、浩落ち着いて」

空気が悪くなったところに龍司が言う。

「ごめん、だけどこの話題は、やめてくれる」

「いいけど、なんでだ」

「それは言えない」

その言葉を、言った時僅かに浩の手が震えていた。

しばらく雑談をしていると、注文したものが、運ばれてきた。

注文したものを、食べ終わり俺達は、店を出た。

「次に行く所が、行きたい所だから」

そう告げた浩の後を、俺らは付いて行く。

その時俺は、P P Cについて考えていた。

P P C正式名称「パーフェクトプログラムコンピュータ」

ある一人の人物が、開発した世界最高のスーパーコンピュータ

！。

このコンピュータは、世界のあらゆる事態を、予測する。

世界は、今この一台のコンピュータによって動いている。

もうそれ無しでは、今の世界は成り立たなくなっている。

そして、このコンピュータ通り世界を、動かすために、犠牲
になっている人もいる。

それが、このコンピュータに反対派がいる理由だ。

でも、そんなものが、行く所に関係しているのだろう。

そんな事を、考えていた俺の思考は、次の瞬間に止まってしま
った。

「着いたよ」

その、一言によって。

第3話 到着（後書き）

ここから本編（？）がスタート。皆さん評価してください。読んでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7535t/>

この世は狂っている

2011年10月8日23時25分発行